

「満願寺」、「十一條「片岡庄」「佐会田」に相当する。木簡は一点出土したが、その地点は、絵図で十条・十一條間に「筑紫大道」と失書された南にある「片岡庄」の堀に相当すると思われる幅四・五m、深さ約二・四mの溝の底で、一五世紀後半から一六世紀前半の備前焼・土師器・染付・瓦・橋材等が共伴している。絵図にみえる「筑紫大道」の北、十条に相当する地点には同時期の幅三・五・七m、深さ二・二・四mの堀で囲まれた館跡がある。また、底に墨書きされた青白磁が出土した。なお、他に、鎌倉時代の井戸から木簡がもう一点出土したが、遺存状態が悪く読みきれない。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・<弥次郎>  
・<米>

(86)×20×5 032

付礼で遺存状態が悪く、切り込みの部分で折れているが、ほぼ完形となる。

9 関係文献

兵庫県教育委員会『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和五九年度』(一九八七年)

(岡崎正雄)



(名古屋北部)

1 所在地	愛知県西春日井郡清洲町
2 調査期間	一九八六年(昭61)四月～一九八七年三月
3 発掘機関	財愛知県埋蔵文化財センター
4 調査担当者	小澤一弘・細野正俊・水谷朋和・中野良法・梅本博志
5 遺跡の種類	城郭・都市跡
6 遺跡の年代	平安時代～江戸時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	清洲は、織田信長の居城地として知られているが、中世においても、尾張の守護所が置かれたこの地方の中心都市であり、また、信長以後も、豊臣、徳川政権下の有力大名が次々と入城し、慶長一五年(一六一〇)の名古屋築城に至るまでは全国屈指の城下町を形成していた。
8 木簡の釈文・内容	
9 関係文献	

の調査は、昭和五六年から継続的に実施されているが、遺跡全体が五条川流域の低湿地帯に位置することから、木製品の出土も多く、墨書を有するものも現在までに二〇〇点近くが発見されている。

昭和六一年度は、五ヵ所の調査区で、合わせて約八〇〇〇<sup>2</sup>m<sup>2</sup>の発掘調査を実施したが、このうち、二地点において、木簡類の出土があつた。

#### 一 神明町地区 (IKJS-六-B)

名古屋環状二号線建設に伴う事前調査として実施。調査地点は、『清須村古城絵図』によれば、「中堀」と「内堀」を結ぶ南北方向の大溝の位置にあたり、発掘の結果でも、幅四五m、深さ一m余りの「堀」の存在を確認することができた。

板塔婆の出土した溝SD-七は、天正一四年(一五八六)頃と考えられるこの「堀」開鑿時の整地により埋没している。

#### 二 本町地区 (IKJH-六-D)

五条川河川改修に伴う事前調査として実施。この地区は、「外堀」と「中堀」の間にあたり、城下町期では町屋を中心とした地区であり、また、「清須越」以降においては、美濃街道の宿場としての町並みが形成されていた部分である。このうち、今回の調査地点は、宿場の発展に伴い近接する甚目寺村より移転したとされる「久証寺」の旧境内地にあたっている。

柿経の出土した土壤SKO五は、東西七・一m、南北一八m程の

ほぼ長方形の池状の遺構であり、この埋土下層からは、柿経の他に「志野」「織部」をはじめとする多量の陶磁器類、あるいは、箸、漆椀などの木製品が一括出土している。埋土上層は、厚い整地層となっているが、これは、寛永元年(一六二四)のこととされる「久證寺」建立に伴うものである可能性が高い。

#### 8 木簡の釈文・内容

##### 一 神明町地区 (IKJS-六-B)

###### 溝SD-七

(1)  ×無妙法蓮華經 〔為カ〕  □聰寿幽儀罪障 〔七月×(496+23)×(63)×3 061  ×……

□不復受

##### 二 本町地区 (IKJH-六-D)

板塔婆の断片であり、文言、書体から法華宗系と考えられる。清洲城下町遺跡では、断片を含め、現在までに二八点の板塔婆の出土例があるが、法華宗系と考えられるのは、この一点のみである。柱目材を用い、焼損のため頭部の形状は不明であるが、下端は串状となる。

#### 二 本町地区 (IKJH-六-D)

###### 土壤SKO五

(1)  [波カ]  罷密多無

般若心経を書写した柿経の断片。清洲城下町遺跡では、現在まで

1986年出土の木簡



清洲城下町の「堀」の復元と木簡の出土地点

●昭和60年度以前 ▼昭和61年度

に、二地点から二四点ほど柿経の出土例があるが、原典が確認されたものは、いずれも法華經であり、それ以外の經典を書写したもののは、本例が初めてである。

9

関係文献

なお、木簡の釈読にあたっては、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部加藤優氏の御指導を得た。記して感謝したい。

財愛知県埋蔵文化財センター『年報 昭和六一年度』(一九八七年)

(梅本博志)

## 愛知・清洲城下町遺跡(2)

1 所在地 愛知県西春日井郡清洲町

2 調査期間 一九八七年(昭62)一月~三月

3 発掘機関 清洲町教育委員会

4 調査担当者 高橋信明

5 遺跡の種類 城郭・都市跡

6 遺跡の年代 平安時代~江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(名古屋北部)

清洲(須)の地名は、一四世紀頃の『神鳳抄』にキヨスとみえるのが最初である。清洲の歴史的重要性が高まつたのは、文明八年(一四七六)に尾張守護所が下津城から清洲城へ移されてからである。尾張の中心都市としての機能は、織田信長の入城から、慶長一五年(一六一〇)の名古屋城築城までである。以後、五条川を利用した城下町は解体され、美濃街道の宿場町とな